ジャンプ

10月29日
Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

10月29日のおはなし「ジャンプ」

　あなたがたがこの文章を読むためには、まずぼくが書き残したものが、あなたがたのいるその時代まで残らなくてはならない。紙に書いたものであれ、石に刻んだものであれw。でもできることならこの文章がデジタルデータとして電脳空間に残るようにしたい。それなら、どこかに残り続け、誰かに発掘してもらえる可能性が高まるからだ。容易に複製できるからね。

　けれども残念なことに現在はまだインターネットは出現していないし（前身のアーパネットは既に稼働しているはずだが、もちろん一般人の手の届くものではない）、それよりなにより日本語をデジタルに入力するためのデバイスがまだ存在しない。

　でも保存方法はともかくとして、ぼくとしてはこれを書き残しておきたい。なぜならぼくが突然にいなくなったことを不審に思ったり、あるいはそのことで不快に感じたり、これは思い上がりかも知れないけれど、ぼくがいないことを悲しんだり寂しがってくれたりする人がいるかも知れないからだ。

　だから2011年の東京でお世話になったみなさんに向けてこれを書き残します。うまくあなたがたの目に触れますように。そもそもぼくはその時代の人間ではありませんでした。ぼくの生まれは太平洋戦争が終わって間もなくです。はい。あなたがたにとっては大昔でしょう。よくみんなはぼくの考え方や価値観が時代錯誤的にかっとんでいるといって笑いましたが、それも当たり前で、ぼくはあなたがたが知らないようなとんでもない困窮生活を知っているからです。

＊　　＊　　＊

　22歳の年にぼくはジャンプした。いきなり2007年に放り込まれた。これはもうとんでもない衝撃だった。ぼくの知っていた世界は1969年で、学園闘争が全国で沸騰し、ビートルズが解散を宣言し、ベトナム戦争が泥沼に突っ込んだことが明らかになったところだった。

　それがいきなり2007年だ。人々が道を歩きながらコンパクトのようなものを耳に付けてベラベラ喋っている姿を見たときは、幻聴の聞こえる人がたくさんいるのかと思いぞっとしたことを覚えている。それが携帯電話だとわかってからも、あの姿には違和感があったなあ。電車の中でもみんな何かを拝んでるみたいに携帯電話をいじっているしね。

　それから道にドブがないことに驚き、川があるはずの場所が道になっていることに驚き、鳥の少なさに驚き、外人がものすごくたくさんいるのかと思ったら髪を染めた日本人だと気づいて驚き、その後、実際にも外人がたくさんいることに驚き、とにかく何から何まで驚き通しだった。アングラでしかあり得ないようなヌードが当たり前に氾濫しているのは嬉しい驚きだったけど、4年間暮らすうちにそれはかえって味気ないものだと思うようになった。

　そう。4年間。ぼくは戻る方法を探し続けていた。3年目にようやく同じような立場の人間に出会うことができ（インターネットはその時とても役に立った。いかれた妄想を持つ人にもたくさん出くわす羽目になったけどねw）、ジャンプに関する実用的な情報、つまりジャンプするためのテクニックを学んだ。

　今年になって、ぼくは元の世界に戻ることに決めた。大宅壮一文庫に通い、1969年から1973年にかけての風俗や流行を頭にたたき込んだ。ぼくはその4年間をまるっきり体験していないので、うまく戻れた時に困らないようにというのも理由の一つだが、それだけじゃない。自分が行きたい時代のイメージを明確に持っていることと、その時代に存在したものを所持していることは、ジャンプの基本テクニックだとわかったからだ。

　手に入る限りのビデオやニュース映像もチェックした。ヒットソングをまとめて聴くのはなかなかの経験だったし（あなたがたにはわからないニュアンスがぼくは、いわば同時代人としてわ

[illegible]かるわけだからね）、コマーシャルソングなんかを聞いていると結構フツーに楽しめた。そしてジャンプしてから4年後の世界、ぼくが26歳の世界、1973年めざしてジャンプした。

　でもそれからはうんざりするほど失敗だらけの旅行になった。明治維新前の江戸では歴史を変えかねないような大騒ぎを起こし、明治時代からなかなか離れられず、戦争直前と戦争中の東京市に2度出現し、1980年代を3個所訪れた（3個所というのもヘンな表現だが、とにかく1982年と1985年と、あと短かったのでよく覚えていないが、たぶん1988年）。そうだ。1969年ではあやうく4歳若い自分自身に遭遇しそうになった。

　ジャンプを繰り返すたび体力的にぼろぼろになっていって、これ以上続けるか、1969年でおとなしく暮らすか真剣に悩んだ。けれどせっかく近所まで（近所というのも変な表現だw）戻ってきたのにと思い、これが最後だと思ってジャンプした。到着した世界でぼくはしばらく気を失っていた。目覚めるとかつて住んでいた町の公園のベンチに寝ていて、公園脇の家の開け放った窓からテレビのコマーシャルが聞こえてきた。

　　……さっさかさっさかかけよ！
　　あったかーい、ごーはんに　かーけたのりたま、
　　こーんな　うまーいもの、ちょっとないよ！

　ぼくは1973年に、昭和48年に戻ってきていた。いまぼくはそっちで身につけたしゃべり方や、身ぶりをうっかり使っては失笑を買っている。でもやっぱりここがぼくのすみかだ。次にそこに行くとき、ぼくは60過ぎのじいさんだ。あなたがたには気づいてもらえないかも知れない。いや。あなたがたには会えないのだろうか？　なぜならぼくは歴史を変えるつもりだからだ。

　できるのかどうか分からない。天災を止めることはできないだろう。でも、せめて人間の手でできることを何でもやってみようと思う。ひょっとするとぼく一人では歴史は変わらないかもしれない。ただのうるさい社会運動家として黙殺されるかもしれない。世界は変わるかもしれないし、ぼくの働きかけなど誤差で終わり、体験した通りのことが起こるかもしれない。

　もしもうまく世界が変わったら、恐らくぼくが出会ったあなたがたと会うことはできないということを意味するだろう。だってそこは別な世界だからだけれど、それでもぼくはあなたがたを探しに行くと思う。2011年にまだ生きていることができたら、ぼくはあなたがたに会いにいく。ぼくが去った後のあなたがたを。無事にあなたがたを見つけることができて、あなたがたもぼくを覚えていてくれたら、そうしたら大人ののりたまでも出して歓迎してください。

（「のりたま」ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い＆お誘い

　Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？　もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブクログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

　「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそこのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

　現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→公開中の作品一覧

　SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「Sudden Fiction Project Guide」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

　ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、Facebookページなどに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

　読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

　10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「急募！お題　この秋Sudden Fiction Project開催します」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！　はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

　こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

ジャンプ

http://p.booklog.jp/book/35367

著者：hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/35367

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/35367

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.